

## 第九章 関係詞(2)

### レクチャー1

「what+名詞」と「which+名詞」。

(1) what や which の後ろの「名詞」の働き。

関係代名詞の what, which については、直後に「(無冠詞)名詞」が挿入される  
ことがあります。以下の2つの英文を見てください。

① I will give you what I have.

② I will give you what money I have. ☞ whatの後ろに「名詞(money)」が挿入されている。  
[名詞]

①も、英文として成立しています。意味は「私が持っているものを君にあげよう」  
です。

実は、②のように「(無冠詞)名詞」が what(や which)の後ろに挿入されると、その  
「名詞」は what, which の具体的な中身を(同格的に)説明する働きをします。

what/which の後ろに挿入される名詞についての補足

これは疑問代名詞の what/which の場合も同じ。たとえば

What music do you like best? ☞ what = music  
[名詞]

どんな音楽が一番好き?

Which season do you like best? ☞ which = season  
[名詞]

どの季節が一番好き?

上記の例文は、疑問代名詞の what/which を用いた例文だが、それ  
ぞれの直後に挿入された music, season という名詞は、what/which  
の具体的な中身を、やはり(同格的に)説明する働きをしている。

つまり、「私が持っているもの」でも意味は通じますが、それでは私が何を持っているのかはつきりしません。そこで money を挿入することにより、

「what (I have) = money」

であることがわかる ( money は what の中身を具体的に説明している)わけですから。そうすると②の意味は、「私が持っているお金を(全部)君にあげよう」となるのです。

④なぜ「全部」という意味が付加されるかについては後述する。

この「what+名詞」「which+名詞」を用いた例文をいくつかあげてみましょう。

He told me what information he knew.

彼は、自分が知っている全ての情報を私に語ってくれた

He spoke Korean, which language we didn't understand.

彼は韓国語を話したが、私たちはそれがさっぱり理解できなかった

これらの「名詞」の特徴は、「名詞」部分を省略しても文全体が成り立つ点です。

## (2)whose との違い。

所有格の関係代名詞、whose も「whose+名詞」と、直後に必ず自身が修飾する(無冠詞の)名詞をとりますね。もし文法問題で、空欄の直後に無冠詞の名詞があった場合、所有格の whose を正解にすべきか、「what+名詞」「which+名詞」の what や which を正解にすべきか…、これはとても悩むところです。そこでこれを一発解決してしまう裏技を伝授しましょう。

実は whose と what, which では、直後の「(無冠詞の)名詞」の働きに大きな違いがあるのです。

### ① what, which の後ろの名詞は、それを消しても文全体は英文として成り立つ

④つまり、無冠詞の名詞に、節の中で役割がない。この名詞は、what, which の具体的中身を(同格的に)説明する働きをしているのみ。

(ex) He told me what information he knew.

→ He told me what he knew.

彼は、自分が知っていることを私に語ってくれた

He spoke Korean, which **language** we didn't understand.

→ He spoke Korean, which we didn't understand.

彼は韓国語を話したが、私たちはそれを理解できなかった

- ② **whose**の後ろの名詞は、それを消すと、文全体が英文として成り立たなくなる  
罫つまり、無冠詞の名詞が、節の中で役割をもっている。

(ex) I have a friend whose **father** is a famous actor.

父親が有名俳優である友人をボクは持っている

× I have a friend whose is a famous actor.

### (3) what[which] の直後の「(無冠)名詞」のまとめ。

①節内での役割がない(その名詞を消しても英文として成り立つ)

②what[which] と同格で、what[which] の具体的中身を表している  
罫つまり「**what[which]=後ろの名詞**」の意味関係になる。

それに対して whose とその直後の名詞は「**whose≠後ろの名詞**」の意味関係になるのがその特徴といえます。

①what[which] = 「後ろの名詞」

(ex) I will give you what **money** I have.

罫 money は what の具体的中身を示しており、「what(I have)=money」の意味関係になっている。

②whose ≠ 「後ろの名詞」

(ex) I have a friend whose father is a famous actor.

罫「whose≠father」の意味関係になっている。

### (4) 「what+名詞」と「which+名詞」のそれぞれの特徴。

- ①「what+名詞」の what は、関係代名詞の what よりも強調的な意味合いが強く、以下の2つの意味(ニュアンス)を持ちうる

1. 「～するすべての[名詞]」 =all the+名詞+(that) ～

2. 「～する少ないながらもすべての[名詞]」

=all the little[few]+名詞+(that) ～

特に、2の意味を明確にするために、

what+little[few]+名詞 ～

という形になることもよくあります。以下にいくつか例をあげてみましょう。

(ex) I'll give you what money I have with me now.

今私が持っているお金はすべて君にあげよう

=I'll give you all the money (that) I have with me now.

I gave him what little help I could.

私は彼にわずかではあるが私のできる限りの援助を与えた

=I gave him all the little help (that) I could.

☞ few にするか、little にするかは、直後に「可算名詞」がくるなら few を、「不可算名詞」がくるなら little を用いる。

② 「which+名詞」は、必ずカンマが直前に付く。「,+前置詞+which+名詞」の形で用いられることが多い

☞実際「,+前置詞+□+名詞+完全な文」という構造の文法問題のほとんどは、which が正解と見ていい。

The storm raged all night, during □ time the climbers waited to be rescued.

① which    ② how    ③ whose    ④ what

上の問題でも「, during □ time」という構造はまさに「,+前置詞+□+名詞」。カンタンに正解は①(which)とわかってしまいます。

ただもう1つの見極めの方法として、上記のように「,+前置詞+which+名詞」の形になる英文は、その部分を「and+前置詞+that[those]+名詞」で書き換えられるというルールがあります。確かに上の問題も以下のように書き換えが可能ですね。

The storm raged all night **and** during **that** time the climbers waited to be rescued.

その嵐は一晩中吹き荒れ、そしてその間、登山者たちは救援を待っていた  
現代英語では上記のように表現するのが普通で、「which+名詞」という形はほとんど使われなくなってきているのが現状です。

- ③ 「what+名詞」は先行詞を必要としない。「which+名詞」は必ず先行詞を必要とする。

## レクチャー2

### 関係代名詞の as。

④ 文法問題で頻出なのは(2)の(決まり文句的な) as。

(1)先行詞に such や the same、(副詞)as がつく場合、直後の関係代名詞は as になる。

- ① the same A(名) as V[S+V]～ 「～と同一のA」
- ② such A(名) as V[S+V]～ 「～するようなA」
- ③ as 形詞+(a)+A(名) as V[S+V]～ 「～する(のと同じ)だけのA」

(ex) You have made the same mistake as you made yesterday.

君は昨日と同じミスをしているよ

④ as の代わりに that など、他の関係詞もこれる。

You should choose such friends as will understand your feelings.

あなたの気持ちを理解してくれるような友人を選ぶべきだ

He is as brave a man as ever lived.

彼は類まれな勇敢な男だ

=He is a very brave[勇敢な] man.

The refugees were given as much food as they could barely[かろうじて] live on.

難民たちはかろうじて生きていけるだけの食糧を与えられていた

## (2)主節やその一部を先行詞とする as。

関係代名詞の as も「, which」と同じように、主節全体(又はその一部)を先行詞としてとることができます。

as の導く節が、(先行詞である)主節よりも前に出ることができる(which節は、先行詞の前に出ることできない)のが、「, which」との大きな違いです。

そしてこの種の as は

① as is often the case with A 「Aにはよくあることだが」

② as is usual with A 「Aにはいつものことだが」

といった決まり文句的なものが多いと言えます。いくつか例をあげてみましょう。以下の英文の先行詞はすべて主節です。

(ex) Jim is very positive, as his work shows.

ジムは仕事ぶりでわかることであるが、とても前向きである

As everyone knows, James succeeded in the entrance exam.

誰もが知っていることであるが、ジェームズは入学試験にうかった

As is often the case with young people, the man was overconfident.

若者によくあることだが、その男は自信過剰だった

### 関係代名詞の as と which の相違点

以下は参考までにまとめたのみで、ことさら暗記の必要はない。

- ① which は「先行詞そのもの」のみを指すのに対し、as は (which よりも軽く)「先行詞+そういった類のこと」までも含む。

これは、as には元々接続詞として「…のように、…なので」の意味があり、関係代名詞になっても根底にその意味が残っているから、と見ることができる。以下の英文で「, which」とのニュアンスの違いを確認しよう

(ex) Jack was late for school, as is often the case with him.

ジャックは学校に遅刻したが、それは彼にはよくあることだ

上例の as は、先行詞の「ジャックが学校に遅刻したこと」プラス、(ジャックに関する)そういった類のことも含んでいると見ることができる。

(ex) He said he was a businessman, which was a lie.

彼は自分は実業家だと言ったが、しかしそれはウソだった  
それに対し、上例の which は、先行詞の「彼が自分は実業家だと言ったこと」そのことのみを指しています。

- ② as が導く節は主節の前にも置かれるが、which が導く節は、必ず主節の後に置かれる。

(ex) As was expected, she told a lie to me.

予測されたことであつたが、彼女は私に嘘をついた  
=She told a lie to me, which was expected.

- ③ as が主格になるときは、(直後の)動詞は be 動詞か seem などの動詞に限られている。which は動詞の種類は問わない。

(ex) He married her, which[×as] delighted us.

彼は喜ばしいことに彼女と結婚した

- ④ 否定節を導く場合は、which はよいが as は使えない。

(ex) ○ Tim has divorced his wife, which nobody knows.

× Tim has divorced his wife, as nobody knows.

ティム奥さんと離婚したが、誰もそれを知らない

○ Tim has divorced his wife, as everybody knows.

ティム奥さんと離婚したが、皆そのことを知っている

### レクチャー3

前置詞+which[whom]+to V[原形]。

(ex) We all need something for which to live.

私達は皆、生きがい[生きる目的]が必要である

上の例文は非常に堅い言い方で、あまり普通使う形ではありません。  
が、

- ①なぜこのような構造が取られうるのか[成り立つのか]
- ②どのように解釈すればいいのか

という点は、しっかりおさえておきましょう。

### (1)なぜこのような構造が取られうるのか[成り立つのか]

これは、結論的には「主語 + be動詞」が which[whom] 直後に省略されている  
のです。先程の英文も元々は

We all need something for which we are to live.

だったのです。

are to は、いわゆる be to 構文。be to 構文は、それを一種の助動詞 ( will / can /  
should ) と見なすべき構文でしたね。

この英文では should の意味を表していると見ればいいでしょう。

つまり something ~ live は、以下のように書き換えることができます。

⇒ something for which we should live.

そうすると for which 以下は、以下のような英文だったと見ることができます。

①先行詞(something)を which に代入し、その for something を節末尾に移動  
させる。

we should live for something.

私達は何か(しら)を求めて生きるべきだ

② for は「目的」を表す。

結果として something for which we should live. つまり something for which to  
live は、「求めて生きるべき何か(しら) ⇒ 生きがい[生きる目的]」と訳せます。

もう一つ例文をあげてみましょう。

(ex) We should give children a variety of books from which to choose.

上記の英文の a variety of books from which to choose は、which 直後に省略さ  
された「主語+ be動詞」の省略を補えば



a variety of books from which children are to choose

となります。そしてこの英文では are to は can の意味を表していると見るといいでしょう。

⇒ a variety of books from which children can choose

from 以降は、元々以下のような英文だったと見ることができます。

① 先行詞(a variety of books)を which に代入し、その from ~ books を節末尾に移動させる。

Children can choose from a variety of books.

choose from[between]~ で「~から(一つを)選ぶ」という語法があり、「子供たちは多様な本から(一つを)選択できる」となります。

そうすると最初の英文は、「我々は子供達に(彼らが)選択できる多様な本を与えてあげるべきだ」となります。

## (2)どのように解釈すればいいのか

今紹介したように、この形の解釈は

- ① 関係詞直後に「主語 + be動詞」が省略されているとみる
- ② そうすると本来、関係詞節内は「be動詞 + to V[原形]」となるが、これは should もしくは can の意味を表す be to 構文。したがって関係代名詞を含む部分は

前置詞+which[whom] S should[can] V

と読み換えてみる

といいでしょう。

もう一つの考え方は、

前置詞 + which[whom]+ to V[原形]

部分は to V[原形] と前置詞をひっくり返して

to do[原形]~ + 前置詞

とし、形容詞用法の不定詞句に書き換えてしまうのです。

愈(不定詞の)形容詞用法とは、(不定詞が)後から前の名詞を修飾する用法。

そうすると一番はじめの英文も

⇒ Everybody needs something to live for.

と書き換えることができます。

もう1つだけ例をあげてみましょう。

(ex) What is the best way in which to learn English ?

上の英文の下線部も、to learn English in と書き換えることができます。

⇒ What is the best way to learn English in ?

そうすると、「英語を身につける一番よい方法は何ですか」と英文全体が訳せます。

もちろん、the best way in which we can learn English と読み換えることも可能です。

### 《もう一步深く!! 「疑問詞+to V[願]」について》

「疑問詞 + to V[願]」は「疑問詞+(す)べきか」と訳します。

(ex) I didn't know what to do next.

次に何をすべきかわからなかった

これについても、疑問詞の後ろに「主語+be動詞」が省略されていると見たらいいでしょう。上記の英文も

⇒ I didn't know what I was to do next.

と書き換えることができます。そしてこの be to は should の意味を表していると見ます。

⇒ I didn't know what I should do next.

だから「疑問詞 + to V [彫]」は「疑問詞+(す)べきか」と訳せるわけです。

## レクチャー4

関係代名詞+ever(whoever/ whomever/ whichever/ whatever)の用法。

### (1)普通の関係代名詞との違い。

関係代名詞+ever(whoever/ whomever/ whichever/ whatever)は、文法用語で「複合関係代名詞」と呼ばれます。ever のない、普通の関係代名詞との違いは以下の通りです。

#### ①関係代名詞+ever は(自身の中に先行詞を含んでおり)、先行詞を必要としない

(ex) You may take whoever wants to go.

行きたい人は誰でも連れて行ってよい

上の英文でも、whoever の前には先行詞になれるような名詞はありません。つまり関係代名詞+ever節は、形容詞節になることはないのです。

名詞節(自身がS・O・Cになる)か、副詞節(S・O・Cにならない)のどちらかの働きをします。ちなみに上の英文の whoever節は、take の目的語になっており、名詞節です。

#### ②譲歩(の副詞)節を導くことができる

(ex) Whoever says so, I don't believe it.

たとえ誰がそう言ったとしても、私は信じない

関係代名詞+ever節が副詞節になる場合、上の英文のように「たとえ～しても」という譲歩節を導きます。

#### ③単なる疑問代名詞の強調形として使われることもある

(ex) Whoever said so?

一体全体だれがそう言ったのだ

上の英文で whoever は、疑問代名詞の who の強調形として使われています。

では具体的に、関係代名詞+ever の用法について整理していくことにしましょう。

## (2)名詞用法。

これは、関係代名詞+ever(whoever, whomever, whichever, whatever)が導く節全体が、英文中で

①S(主語)・O(目的語)・C(補語)

②前置詞の目的語

のどちらかになっている場合のことを指して言います。

その場合、関係代名詞+ever(が導く)節は、「～するものは誰[何・どちら]でも」と訳します。要するに最後を「～でも(みな)」でまとめてしまえばいいのです。具体例をあげてみましょう。

(ex) Whoever finds it may keep it.  
S V O

上の英文では、whoever節が文の主語になっています。そこで「それを見つけた人は誰でも、それを持って[保持して]いてもいい」と訳せるわけです。なお、この用法の whoever は anyone who[that] で書き換えられます。

→ Anyone who[that] finds it may keep it.

今度は whichever の例をあげてみましょう。

(ex) You can have whichever you like.  
S V O  
We can take whichever ball he is not using.  
S V O

上の2つの英文の whichever節は、共に動詞(have, take)の目的語になっています。そこで上段の英文の whichever節は「あなたが好きな方どちらでも」、下段の英文の whichever節は「彼が使っていないボールはどちらでも」と訳せるわけです。それぞれの全体の意味は「あなたが好きな方どちらでももらえます」「彼が使っていないボールはどちらでも持っていく(使う)ことができます」となります。

ちなみに whichever は、下段の英文のように

### whichever + 「名詞」 + V[S+V]~

と、直後に「(無冠詞の)名詞」をとることがあります。この「名詞」の働きは、「レクチャー1」で紹介した「which+名詞」の場合の「名詞」と全く同じで、whicheverの具体的な中身を(同格的に)説明する働きをしているのです。つまり「whichever = 名詞」の関係です。このような whichever節は、「(Sが)~するどちらの[名詞](でも)」と訳せばいいでしょう。

最後に whatever の例をあげてみましょう。

(ex) We will do whatever you tell us to do.  
S V O

The animal eats whatever food it can find.  
S V O

上の2つの英文の whatever節は、共に動詞(do, eats)の目的語になっています。そこで上段の英文の whatever節は「あなたが私達に言うことは何でも」、下段の英文の whatever節は「それ(その動物)が見つけれられる食べ物は何でも」と訳せるわけです。それぞれの全体の意味は「あなたが私達に言うことは何でもやります」「その動物は、見つけれられる食べ物は何でも食べます」となります。

ちなみに whatever は、下段の英文のように

### whatever + 「名詞」 + V[S+V]~

と、whichever 同様、直後に「(無冠詞の)名詞」をとることがあります。この「名詞」の働きも(「レクチャー1」で紹介した)「what+名詞」の場合の「名詞」と全く同じで、whateverの具体的な中身を(同格的に)説明する働きをしているのです。つまり「whatever = 名詞」の関係です。このような whatever節は、「(Sが)~するどんな[名詞]でも/としても」と訳せばいいでしょう。なお、この用法の whatever は anything which[that](又はany+名詞+which[that])で書き換えられます。

→ We will do anything which[that] you tell us to do.

→ The animal eats any food which[that] it can find.

### (3)副詞用法。 ㊦ 譲歩節を導く。

これは、関係代名詞+ever(whoever, whomever, whichever, whatever)が導く節全体が、英文中で **S(主語)・O(目的語)・C(補語)のどれにもなっていない** 場合のことを指して言います。

その場合、関係代名詞+ever(が導く)節は、「たとえ誰[何・どちら]が[を]~しても」と訳します。要するに最初と最後を「たとえ~しても」でまとめてしまえばいいのです。

それではこの用法の関係代名詞+ever の具体例をあげてみましょう。

(ex) Whoever else object, I will do it.  
                          S      V      O

上の英文では whoever節が副詞節になっています。簡単にそれがわかる理由は

**「主節よりも左側にある語(句・節)は、(倒置を除き)基本的に副詞の働きしかない」**

というルールがあるからです。

㊦・「主節」とは、(従位)接続詞・関係詞・疑問詞などが先頭についていない「(いわゆる裸の)S+V」のこと。

・ちなみに、文頭に「関係代名詞+ever節」があり、直後にV(動詞)が続くような英文では、「関係代名詞+ever節」がその英文のS(主語)になっているとみたらいい。

(ex) Whoever finds it may keep it.  
                          S                  V      O

そこで「たとえ他の誰が反対しても、ボクはそれをやります」と訳せるわけです。なお、副詞節を導く関係代名詞+ever は、「no matter+who[which/ what]」で言い換えられるので、上の英文は以下のように書き換えられます。

㊦ということは、「no matter+who[which/ what]」が導く節が「S・O・C」になることはないということになる。

→ No matter who else object, I will do it.

もう1つ whoever を用いた例を見てみましょう。

(ex) I won't do it, whoever asks.  
                  S      V      O

上の英文は、it までで文型は完成しており、whoever節は文の主要素[骨組み]にはなり得ません。つまり、副詞節と見ざるを得ません。そこで「たとえ誰から頼まれたとしても、そんなことはやらない」と訳せるわけです。

今度は whichever の例をあげてみましょう。

(ex) Whichever book you borrow, you must return it by Friday.  
                                    S                                    V                                    O

上の英文でも、whichever節は主節よりも左側にあるので、副詞節になっていると判断できます。そこで「たとえどちらの本を借りるとしても、金曜日までには返さなくてはなりません」と訳せるわけです。ちなみに whichever直後の名詞である book は、先程説明したように、whichever の具体的な中身を説明する働きをしており、「whichever = book」の関係です。

そしてこの英文の whichever も no matter which で書き換えられます。

→ No matter which book you borrow, you must return it by Friday.

最後に whatever の例をあげてみましょう。

(ex) Whatever happens, I will not change my mind.  
                                    S                                    V                                    O

Whatever nonsense the newspapers print, some people believe.  
  S  V

上の2つの英文中の whatever節は、共に主節よりも左側にあるので副詞節になっていると判断できます。そこでそれぞれ

「たとえ何が起きるとしても、ボクは決心を変えません」

「たとえ新聞がどんな無意味な記事を載せても、それを信じる者はいる」

と訳せるわけです。ちなみに下段の英文中 whatever 直後の名詞である nonsense は、これまた先程説明したように、whatever の具体的な中身を説明する働きをしており、「whatever = nonsense」の関係です。

そしてもちろん、この英文の whatever も no matter what で書き換えられます。

→ No matter what happens, I will not change my mind.

→ No matter what nonsense the newspapers print, some people believe.

(4) よくあるタイプの問題。

以下の問題の空欄部に入りうる選択肢はどれかわかりますか？

Q : I will give the ticket to ( ) wants it.

- ① whoever    ② whomever    ③ who    ④ whom

まずこの英文には、空欄の前に先行詞になれる名詞がないので、先行詞を必要とする who, whom は正解にはなりません。ちなみに先行詞を必要としない関係代名詞は以下の2つのみ。

1.what

2.関係代名詞+ever

では正解は①か？②か？

以下のような英文を頭に浮かべる人は、目的格の②が正解と思うかもしれませんが、

(ex) I will give the ticket to him.  
[目的格]

確かに普通の代名詞なら、前置詞の後ろは目的格になるはずですが、ところが正解は、実は①なのです。

関係代名詞の格を決める際の鉄則を、もう一度思い出してください。

「関係代名詞の格は、後続の(関係詞)節内の欠けている格と一致する」

本問の場合、空欄の後ろ部分は「主語」が欠けた文。従って「主格」の関係代名詞の who の仲間である①の whoever が正解となるのです。そしてこの whoever が導く節全体が、前置詞(to)の目的語となっているのです。

I will give the ticket to	(前)	whoever	wants	it
		[主格]	V	O
		[前置詞の目的語]		

問題文の訳 は「欲しい人には誰でもそのチケットをあげよう」となります。



(5) whatever にするか whichever にするかの見極め。

両者の入れ分けは、疑問代名詞の what と which を入れ分ける際と同じルールを用いればいいのです。つまり、「選択すべき範囲が決まっている」場合には whichever を用い、決まっていない[限定されていない]場合には whatever を入れるのです。

(ex) I have three books here. Take whichever[×whatever] you like.

私はここに三冊の本を持っている。どれでも君が好きなものを取りなさい

上の英文の場合、最初に「三冊の本」と限定されているので whichever が入ります。

ついでに what と whatever の入れ分け問題もやってみましょう。以下の空欄部に what と whatever どちらが入るかわかりますか？

① (        ) he may say, I will do it.

② He is innocent, (        ) you may think.

正解は両方共に whatever です。その理由は、「関係詞(1)」にも書きましたが、what が導く節は、(what we call などの決まり文句的なものを除いて)基本的に S・O・Cのいずれかになるのです。ところが①の空欄から say までの前半部は、主節よりも左側にあり、副詞節です。

主節よりも左側にあるものは、(倒置などを除いて)基本的に副詞の働きをする。つまり S・O・Cのどれにもならない。

②も innocent までで文型(SVC)は出来上がっており、空欄部以降が S・O・Cのどれかになるとは考えられません。そこでもう what は入れないはずだとわかるのです。ちなみに①の訳は「彼が何と言おうと私はそれをする」、②の訳は「君がどのように考えようと彼は無罪だ」です。

ただ whatever 節も S・O・Cになる場合があり、以下のような文では what、whatever どちらも入り得ます。

I'll give you (        ) I have.

しかしながら、そのようにどちらでもいいようなものは問題として問われることはないので心配しなくても大丈夫です。

関係副詞+ever(whenever/ whenever/ however)の用法。

関係副詞+ever は、文法用語で「複合関係副詞」と呼ばれます。この関係副詞+ever も、必ず先行詞なしで用いられます。また関係副詞+ever が導く節は、副詞節にしかありません。

④ wherever, whenever, however が単なる疑問副詞(where, when, how)の強調形として使われることもある。

(ex) Wherever can she be ?

彼女は一体どこにいるのだろう

上例の Wherever は、Where の強調語として使われています。

それでは具体的に見ていくことにしましょう。

(1) wherever 「どこで[へ]~しても[しようとも]」=no matter where

(ex) Wherever I go[may go], I usually see her.

私はどこへ行こうとも、大抵彼女に会う

この wherever は譲歩(の副詞)節を導いており、no matter where で書き換えられます。

→ No matter where I go[may go], I usually see her.

④単なる(接続詞の) where の強調としての wherever の用法もある。その場合は「~するところはどこでも」と訳す。at any place where で言い換えられる。

(ex) Sit wherever you like.

好きなところに座りなさい

(2) whenever 「いつ~しても[しようとも]」=no matter when

(ex) I'm ready whenever you come[may come].

いつあなたが来ても準備はできています

この whenever は譲歩(の副詞)節を導いており、no matter when で書き換えられます。

→ I'm ready no matter when you come[may come].

単なる(接続詞の) when の強調としての whenever の用法もある。その場合は「～する時はいつでも」と訳す。at any time when や every[any] time で言い換えられる。

(ex) Come whenever you like.

いつでも好きなときに来てください

### (3) however。

①「程度」を表す however。

However 

{	形容詞	S+[may]+V, 「たとえどんなにSが ～するとしても[しようとも]」
	副詞	

(ex) However hard you [may] try, you can't finish it by yourself.

〔副詞〕

どんなに君が頑張っても、一人でそれを一人で終わられないよ

However late you are[may be], be sure to phone me.

〔形容詞〕

どんなに遅れても、必ず私に電話してください

この用法の however は no matter how で書き換えられます。

→ No matter how hard you [may] try, you can't finish it by yourself.

→ No matter how late you are[may be], be sure to phone me.

②「方法」を表す however。

However S+[may]+V, 「たとえどんな方法で[ふうに]Sが  
～するとしても[しようとも]」

(ex) However we [may] go, we must get there by noon.

たとえどんな方法で行くとしても、正午までにそこに着かねばならない

However you [may] do it, the result will be the same.

たとえどのようにやったとしても、結果は同じだろう

④ちなみに however がカンマ(,)で区切られた場合は「しかしながら」となり、意味的には but に近く、上記の用法とは異なる。

(ex) The mistakes, however, are minor.

間違いは、しかし、些細なものである

You are wrong, however.

だが君は間違っている

#### (4) 「関係代名詞+ever」と「関係副詞+ever」の使い分け方。

- ① 「関係代名詞+ever」は、あくまでも関係代名詞の仲間なので、後ろには「不完全な文」が来る。「関係副詞+ever」の後ろには「完全な文」がくる。
- ② 「関係副詞+ever」は、それが導く節がS・O・Cになることはない。(譲歩の)副詞節しか導かない。

## レクチャー6

### 関係代名詞の二重限定。

#### (1) 関係代名詞の二重限定とは。

2つの制限用法の関係代名詞節が、接続詞を伴わないで同じ先行詞を修飾する用法を関係代名詞の二重限定と言います。1つ目の関係代名詞は省略されることもあります。

例をあげてみましょう。

(ex) There are some people (that) I know who can talk but not write.

上の英文では、(that) I know と who can talk but not write という2つの関係代名詞節が、先行詞(some people)を共に修飾しています。

→ There are some people  $\left\{ \begin{array}{l} \text{(that) I know} \\ \text{who can talk but not write} \end{array} \right\}$ .

上の英文を「二重限定」の意味をしっかりと出して日本語に表せば、以下のようになります。

「私が知っている人の中で[うちで]、(更に) 話すことはできるが字を書けない人が何人かいます」

つまり「私が知っている(人)」とまず一度限定しておいて、「(更にその中で) 話すことはできるが字が書けない(人)」と、もう一度(つまり二重に)限定しているわけです。

ちなみに以下の英文は、接続詞(and)で結ばれているので「二重限定」ではありません。

(ex) Joe is a man (whom) we can depend on and who always lives up to our expectations.

ジョーは頼れる男で、また常に我々の期待に応えてくれる男だ

## (2)二重限定(の関係詞節)と、and で結ばれた関係詞節の区別とその違い。

二重限定の文では、2つの関係詞節の後の方を省略したり、間に and を入れたりすると変な意味になることが多いのです。

(ex) Ted is the only person (that) I know who is suited for the post.

テッドは私の知っている人で、その地位に適任のたった1人的人了

上の英文は、who 以下(つまり後半の関係詞節)を省略したり and を入れたりすると「私はテッドしか知り合いがない」ということになってしまいます。

これに対して and で結ばれているふつうの用法(つまり二重限定でない用法)の場合は、

- ①どちらか一方の関係詞節を省略しても文として成り立つ
- ②2つの関係詞節の順序を入れ換えても意味は変わらない

先程の英文を例にあげて考えてみると

Joe is a man whom we can depend on.

Joe is a man who always lives up to our expectations.

Joe is a man who always lives up to our expectations and whom we can depend on.

上記のどれも文として成り立ち、3つ目の英文については、元の英文と意味が変わりませんね。

### (3) 2重限定の関係詞節のうまい訳し方。

2重限定の関係詞節のうまい訳し方は、

A (先行詞) + B (関係詞節) + C (関係詞節)

となる部分を

「Bである中で[うちで]、更にそのうちCである(ような)A」

「Bであり、かつCである(ような)A」

とまとめるといいでしょう。

(ex) This is the novel that you can read easily which is both interesting and instructive.

これはあなたが簡単に読め、かつ面白くてためになる小説です